小説にみる T. Hardy 像

小　山　浩　代

(1)

Thomas Hardy の小説を中心に，個別に作品解釈を試みた結果[1]を，此処では，彼の文学的特質全体と結びつけてふりかえり考察し直し，作家ハーディの人生観，世界観をより深く理解することにしたい。

彼は，長い生涯にわたり，人間のありのままの姿の中で最悪のものを熟視し，苦悩に埋没し破綻に終わる人々の実相を再現すること，そしてそのような在り方に従来の伝統的信条をはなれて独自の説明，モラル，principle を見出すことに専念した作家である。

他の作家と比較した場合，ハーディほどに悲観的「宿命観」「宇宙観」が問題にされながら，客観性を具えた釈明，体系的な説明が乏しい作家も少ない。文学者としては散文作家(小説)としてスタートして，かなり長期，読者や出版社の世間的要望に従った形で，執筆を余儀なくされつつ，1898年に詩集 *Wessex Poems* を出版，*Winter Words* (1928) まで八冊の詩集を出すに至るまでには，世俗的な前途の見込みを一切捨てる危険を覚悟して，小説は *Jude the Obscure* (1895) を最後の作品にした経緯はよく知られている。そして小説の中では断片的に姿をみせるにすぎなかった宇宙観や神の問題は，散文，韻文詩と叙事詩劇の大作 *The Dynasts* (覇王ら) の中に，作家の自由な立場で著わされることになる。全作品を検討する前に，このような大きい問題，主題をとりあつかうことは，内容方法ともに不十分すぎることであるが，彼が本格的に詩に転向したのは1895年以後であり，それま

での小説から幾つかの疑問をさぐり出しつつ，これからの考察の準備にしたいと思う。

（2）

彼の人間観は，我々人間は耐えることのみ与えられているという見方が主で，その結果，幸福がもたらされようと不幸がもたらされようとも，人間の側から問題にすることではないというのであった。*The Return of the Nature*（帰郷）では，田園的気風が都会の近代的風潮に優り勝利を得ることを暗示した。しかし *The Woodlanders*（森に住む人々）では rural England の森の住人ジャイルズが最も悲運な死にみまわれ，人間の価値評価，判断に対して運命を司るものの無関心と気まぐれをのぞかせるのである。

ハーディほど，個々の人間が易く絶望におちいるべく厭世的人生観をただよわせる作家は，Victoria 朝文学史上少ないと思われるが，人間ハーディを見る時に，あらたに読者の心を不思議に鎮める力をもつのは，彼自身人間に対して希望と光明，救いとやすらぎを望む気持が強かったことにほかならない。耐えるよりほかすべのない生き方を与えられた人間をあくことなく観つづけ想像し，その苦痛を人間の浅薄な小智才覚でもっともらしく解き明かす筋立てを見せるような，安易で，あいまいな考えを最後まで自ら納得できない作家であった。むしろその闘いと忍従のさなかに人間の尊厳を見たのである。無意識に人間を支配する（と彼は考えるが）者に，それと知らず翻弄される人間をあわれみその姿に，人間存在の意義を認めざるを得ないのであった。

しかし単なる厭世主義的作家と異なって，人の心に共感の愛を抱き，親しみを忘れることのできない人間主義のハーディをそこに私たちはみることであろう。蔑まれ，耐えてゆく神秘的な人間に幸福が恵まれるか禍がもたらされるか，この地上界の人間智のはるか及ぶところではあり得ない。ハーディに，霊的世界観が未だというより青年時代に失われたこと（彼の生きた時代が懐疑主義の時代であったにしても）は，彼がそのために反宗

教的になったことを意味するのではなく，むしろ，真剣に神と新しい科学思想に問題をみつけたのである。信仰から懐疑への経験は，*Tess, Jude* の作品にうけつがれているが，同時代の風潮に受けいれられずついに筆を置いたことは周知のとおりである。作中の人物，ジュードにせよ，クリムにせよ，作者ハーディの心の中の苦悩をそのまま表わしているとは認められないが，彼らの運命，作品の性格があきらかに悲劇の基調を特徴としていて，ハーディにとってその悲劇——運命にせよ性格にせよ——の源は，神を見失った，宇宙の支配者であり，これが，彼は疑問を持ちながらも，生涯の主要な問題となって，創作のエネルギーとなったと考えることもできる。この見失った人格神の存在，非存在の究明こそ，ハーディのもっとも核心的テーマであるが，そのままの形で，学生のスタイルで，その素材を作品に具現化することは文学者としては当然避けることになったであろう。

彼の時代の代表的哲学者思想家——ダーウィン，ハウトマン，ショペンハウエルなど——の決定論にかなり影響を受けたことが詳しく論じられているが，ハーディは，その形而上学的内容を長詩劇「覇王ら」に存分に表わすことになる。

（3）

ハーディの決定論的，悲観的思想の内容は，自然界，宇宙，そしてその上に盲目の意思が全てを司り，その視点から人間を描き出すことにあった。登場人物をながめればながめるほど，社会にあっても，自然の支配にあっても，そこに多くを望むことの空しいことを幼くして悟ったハーディの姿が影をおとしているのに気付く。そのように人々の心をしめつける悲壮な容赦ない，唯物論的自然界，近代社会の疎外状況の前兆に，生命をかけて抵抗し生存をまもろうとする姿が，例えば，「帰郷」のユースティシアや「キャスタブリッヂ」のヘンチャード，テスなどに表わされている。他方同じ登場人物でも，トマスン，エリザベス，マーティなどのように，人生から renunciation の教訓を学んで穏やかな日常生活に満足する人物も

見出される。必死に運命と境遇に反抗して破綻を招くユースティシアやヘンチャードとそれは対照的である。

人生の価値とは何かと友人からたずねられた時にハーディはこのように答えている。

For my part, if there is any way of getting a melancholy satisfaction out of life it lies in dying, so to speak, before one is out of the flesh ; ……To think of life as passing away is a sadness ; to think of it as past is at least tolerable.[2)]

確かに「過去」となった出来事，行為は，人間にとって死んだものであり，背後に葬り去られたものであるかもしれないが，その consequences からのがれることは人の力ではなし得るはずはない。敢えてそれを tolerable と考えるハーディの心の奥底に秘められた諦観と強さこそ，あの悲観的人間観にもかかわらず，90歳に近い長寿を完うし最晩年に一番の大作を完成させる源であった。

このような内面的力強さに支えられて，単なる人生の冷たい傍観者ではない温かい心の持主を作品から著者の像として描くことができる。自己中心でなく，喜び，歎き，怒りに敏感に反応し，人間の不幸に真に共鳴できる compassion, fidelity, humility は，彼の実人生に於てはもちろん，創作態度に一貫して流れる宗教的ともいえる資質である。

46歳を迎える頃「何事も宇宙のことわりなり」（"Be not perturbed; for all things are according to the nature of the universal."[3)]）と書いており，Cecil は "one of the most Christian spirits that ever lived"[4)] とハーディの事を語っているが，それでも pessimism の雰囲気を否定しきれないのは，キリスト教の hope を信ずることができなかった彼の心情による。しかし，Christian temper を全くハーディからけしさることはやはりできない。

（4）

文学者の地位が確立し，晩年になるにつれて，公けに名誉ある市民生活

を享受するようになったが，詩人としての才能の評価は，十分に受けることはかなわなかった。また小説の意図もかなり誤解されたり酷評を受けた。作者として心の中では，既成の道徳律を全て拒否していたのではなく，人間の本性を見誤るまいという態度から，自分自身の倫理観を基礎にしてそれをしばしば登場人物に語らせたり，commentを作中に書き著わしている。この手法が，作者の芸術上の弱点として引用されたり非難されることが多い。しかしそのために彼の作品の文学的価値，正当性がどの程度そこなわれるものか一致した考え方は容易に見出せない。

登場人物を設定する場合，彼は人間と community の間のみぞ，疎外感に早くから関心を深めて描写した。

"We must conform!" she said mournfully. "All the ancient wrath of the Power above us has been vented upon us, His creatures, and we must submit. There is no choice. We must. It is no use fighting against God!" "It is only against man and senseless circumstances," said Jude.[5)]

ハーディは一つの世界を人間に敵対するか，無関心なものとして公けにすでに描き始めていたが，最後の小説 *Jude* にも上に引用したような個所がある。注意すべきことは，彼は，世界が人間の行動に与える限界を部分的なものと考えていたのか，或いは，人物達は完全に意思や行動の自由をうばわれた存在として描いていたかである。彼の運命観につながる考え方であり諸作品を検討してみなければならない問題であろう。

His story also depends on an arrangement of an action which reflects his general conclusions about the universe. This is the world without a Providence but conditions in nature and society which, in the absence of Providence, work together to frustrate energy and intelligence.……Those who have imagination and aspiration meet with the frustration of nature's blind biological purpose and society's conventional restrictions.[4)]

小説に現われた Fate の働きを考えるときに鍵になる解釈の一例である。そして人物の行動の自由及び道徳的な観念の意義，もしくはその欠除

ということも新しい問題になってくるであろう。しかし読者にとっては人物そのものの姿が記憶と印象に残る第一のものである。*Tess* (1892) の第五版以後の Preface で, "Let me repeat that a novel is an impression not an argument; and there the matter must rest;……"[5] とハーディ自ら述べ, 次いで *Jude* (1895) 初版の序に "*Jude the Obscure* is simply an endeavour to give shape and coherence to a series of seemings or personal impressions[6]" と記していることに注意したい。自然・遺伝・社会環境によって定められたヘンチャードやテス, ジュードの situation は, 読む人の脳裡によみがえり訴えつづける impression を存分にそなえている。

この situation を創り出す場合, ハーディのよく用いる手法は, 古い Ballad のテーマを骨組みに, 進化論や近代思想の背景も忘れず, 郷土史家の心の響きを感じさせる舞台造りで物語を展開することにある。Wessex という太古さながらの自然環境, 素朴な平穏な暮らしをくり返す農民や森の住人たちが中心となり, 忘れかねる「過去」へのノスタルジャが流れている。彼の作風が読者に語りつぐなつかしさは, そのような伝統的な sources のもつ重みであって, 単なる感傷の彩りなどであり得ない。

他方, 作家は日常性をこえたものを真実らしく表現する手法も持っていなければならないが, ハーディの物語は, 先に述べたように郷土色にあふれた superstition, fork tale を豊富に題材に取りいれて, 彼の時代と現実的には遠く隔たった想像の世界を展開させる。「帰郷」「キャスタブリッヂ市長」など, みなその特徴を示す作品である。

彼が影響を受けた新時代の rationalism に抱いていた尊敬と賛意とともに, 伝承し続けたいと願っていた, 過去になりつつある世界への郷愁との間の葛藤・緊張感が共存する人物が生まれたのである。幼い頃から, 孤独を日常とし, 年令よりはるかに成熟した内省的思考力と観察力を持って, 自然界の風物になぐさみをおぼえ満たされてすごしたハーディは, 田園地方の急激な変化と自分自身の経験の結果から, change, decay を人生の image としてとらえるようになったと思われる。「過去」「衰えゆくもの」の記

憶にむけられる価値と意義は大きい。

その中で Dawinism が与えた影響は，度々述べたが非常に強いものであった。その理論を全て受けいれたのではなくて，弱者にとっては，人生は絶えざる生存競争と見做される考えが，余りにはげしく彼の心をさいなむ結果になり，キリスト教信仰を拒けるまでになった。そのような闘いが，必ずしも支配的な特質の全てを表わすのではないことを，不幸にも彼は納得できないのであった。懐疑的考え方のために，人間世界の環境はそこで，進歩・生活する生きものにとって，如何なる価値をも持たないのみならず，敵対する存在と考えるのである。Blind will に支配されることは理解できないのである。人間が，理性と，未来をみとおす力を持っている限り，その分別にもかかわらず，不都合な采配を受け苦しまなければならないとすれば，justify できない事柄である。

ハーディの願望は，人間の努力や試みによって，意味ある change が行なわれるような世界の発見であった。どこまでも理性にもとづいて精神的情緒的なものを満たすことであった。この世の人間の生活や経験に，また本性に，秩序を与えること，或いは発見することが彼の望みとなった。苦痛，悪，不幸を完全に解き明かすことはできずとも，一つの説明が必要に感じられるのであった。かなうならば，理性と分別を正当なものと安んじて信じ認めることのできる現象界の諸々の，普遍的な法則，道徳的意義を見出すことであったろう。それは更に人間の生存に目標を読みとることであったが，結局失敗に終わり，'a bitterly unhappy man'[7] と後世に見做されるのであった。

（5）

ハーディが，人間を或る宇宙の無人格なメカニズムに属するものと考えたことは「覇王ら」にはっきり現われることになるが，すでに初期の作品 *Under the Greenwood Tree, Far from the Madding Crowd* などの中に認められる。但しあくまで人間対人間，事件対事件の相互の関係に限られるとりあ

つかい方であった。しかし「覇王ら」に至り，その考えは社会・自然環境を超えて，cosmic なカテゴリーにひろがりを深めるのである。彼にとって，宇宙に道徳的特質を見出す夢は消えていたけれども，それでも尚，宇宙が道徳的な支配力に動かされることを祈らずにはいられなかったであろう。しかし人間の心の動きに無関係な，無関心な，未知な力に動かされることを著作を始めた初期から，groomy といえる瞑想な考え方の中に読みとることができるのは先の例のとおりである。彼の主題は，宇宙におかれた人間の predicaments であって，言うまでもなく悲劇的な課題であった。

人間個人個人の行ないは，社会，自然界，歴史上の様々な相のめぐりあわせた現象の，複雑な流れとしくみの糸に操られてゆく。言い換えれば，人人の言動は，本来の意図をはずれた結果をしばしばひきおこす。或る目標を意図したとき，この世に現実に行為となって現われるときには，自然界その他の力に働かされて，くもの巣のようにしか映らなくなる。全能の神ならば予知できることであろうが，人間は未来の事に盲目にしくまれ，くり返し意に反した皮肉な運命の打撃を受け続けてきたと考えられる。一人の人間の行ないが，或る状況の中にくみこまれて，個人と全然異質の性格を帯び，予期せぬ結果を見るのである。

ハーディの物語や詩には，しばしば目につく 'It might have been!'/'if I could only…'/Have known what I know now!'/'Known had I' という言いまわしは，平凡な日常生活の中でも人々の心をよぎるありふれた感情であろう。現実の世界の出来事は，正義・善・真実という抽象的な概念・神の摂理が人間の心の願いのままに現われると信ずる人にとって，皮肉な冷酷な仕打ちである。

地上のささやかな人間の営みの周囲に世人という人々，更に community，歴史，自然の営みが働いており，人間の行動にしばしば限界状況にまで干渉してゆく。殊に自然界に影響され，或る時は恩恵にあずかる人間生活，人生の機微を，ハーディは深く感じとる作家である。彼の物語の中心場面は，風景，天候，季節の擬人法もしばしば用いて，詳細精緻な描写が行な

われ，作品独特の雰囲気をつくりあげられる。

多くの物語は，季節の移りかわりとともに，進行し人物相互のつながりも，四季の変化に従って，発展する。「森に住む人々」は，冬の日に物語は始まり，秋の雨降りの中でウィンターボーンは死に，グレースがフィリップのもとに帰る晩春で終わる。ウィンターボーンの死を悼むグレースの言葉はハーディが人間ドラマの背景と季節のうつり変わりの関係をたくみに使った例である——"her simple sorrow for his loss took a softer edge with the lapse of the autumn and winter seasons.[8] このような例は作品中大変多いが人間と自然界の交流をつねに調和の世界として描くとは限らないのも一面である。人間をとりかこむ環境は，相互に関わりあう「力」を示して，物語の構成上の美しさに貢献して評価されるが，人間から感じとられる自然の威力の冷徹さ，不可抗力，無関心は，別の問題として考えねばならない。

ところで初期の詩の中で，彼は，「自然」を宗教詩人や浪漫派詩人のようには眺められないことを歎く。ハーディの心にうつる自然は，人間の地上界の自然であって霊的世界の自然とは読みとれないように思われる。小説にみられる自然と人間の交わりと同性格のものである。松風は決して神秘的な魂の息吹としてはうたわれていない。風のそよぎにとどまる。ハーディの自然界は，非人格の無分別な力に動かされる現象界の姿であり，神の声に心をすます詩人の観る世界とは異なるように思う。彼が見たり耳にする自然界は主題からみれば，「人間」とはなしては存在しない。自然の中に生きる，或いは投げ出された形の人間の姿といつも共存する世界である。

この自然の現象は，次には歴史の歩みと相たずさえて作家の目に入る。目にうつる世界に刻みこまれた歴史の姿—過去—は幾世代にわたって人々の心と手から受け継がれた文化的背景であり，「環境」である。

全作品中，歴史或いは人間の過ぎ去った営みの場面は，旧い家並，教会堂，風俗習慣，遺跡から現在は姿をあらためて，異なった風景となって具現されているのみならず，現在に生きる人々の心の中に入ってきて，或る時は無情に，思いのままに，人々を行動におもむかせるのである。この

「歴史」は「過去」に抽象化される「時」の概念につながってゆく。

自然・社会・歴史世界は，互いに重なり合っているけれども主要な機能は或る限界内で働いている。地形風土はそこに住む人々の生活を決定し，人々はまた自然の一部である生物学的遺伝を受け継ぎ，社会は歴史を伝えて過去を現在に映し出す。

（6）

このような世界に生きるハーディの人物達は，願望を当然実現できると考えているとき，理想と現実のあいだに，作者はどのようなはからいを案ずるのであろうか。何れにしても小説中の人物は自分達の社会に満足できない状況に置かれる。しかも，より高遠な世界へ憧憬をかりたてられる人物が多く，夢に描かれる良き生活を思って，現在の世界から自ら疎外される方向に走るのである。

自然界に属することは，自然の意図によりたえず威嚇にさらされていることを意味する。一つの community に埋没して生きるうちに人々は，人間も自然と同様 Immanent Will の無知な衝動の力に支配されていることに気付かなくなる。彼らの社会は，人間の作り出した幻の社会であることは知らぬ。この人間社会が真理をおおい隠し，またその社会は，人間同様うつろい易いはかない存在であることを意味している。

実社会の変化，田園生活を破壊するその力は，ハーディの作品全篇のテーマの一つであり，工業化，経済上の発展，文明の進化で代表される力である。この歴史上の一つの epoch は，Wessex 地方の人里はなれた土地の folkway にも抵抗しきれぬ程の影響を与える。その土地で古くから営まれてきた生活は，良し悪しにかかわらず，過去のものとなる運命にある。歴史上の全ての現象が辿るように。

ハーディは，同時代の人々と同じく，疑うべくもなく，宇宙の因果律を認めている。全ての事件，経験に，全て約束された原因がある。彼の考えでは，人生はそのような小さい原因の連なりであり，その結果が次々に新

たな因となるか，或いは外界からの働きかけが一原因になり，新たな影響を受けるかであった。「キャスタブリッヂ市長」の一節によれば，人生とは 'concatinations of phenomena wherein each is known to have its accounting cause.'[9] というように表現される。

（7）

ハーディの作品は殆ど悲劇的結末をつけるように構成されており，登場人物が，或る時は（もっとも多いのは「帰郷」「ジュード」）数名が死ぬ筋となっている。彼らの中には，さけ難く自ら死を選ぶ例もあり，それは彼らの生涯の成行きから余儀ない場合或いは，死ぬことで苦しみや考える事の苦悶をのがれたいと思う場合であり，何れ不自然な事にちがいない。

死の状態への望みやあこがれは，作中人物の死への願望の一番深い原因ではない。もっと強烈な途方もない動機を抱いており，ただ，生の意識からの逃避ではなくて，自分の生きた歴史を，あとかたなく消しさりたいために死を選ぶのである。自らを忘れ去るためのみならず，他人から忘れ去られるために。この世から完全に姿を消すことだけが，この世に生をうけた事に対する罪ほろぼしであり償いとすることができるという理由で。ハーディの主要人物達はそのような死によって，作者の予測をみごとに作中で正当化している。この死への不可思議な願望はハーディの文学に大変なじみのある特性である。ヘンチャードの遺書には，"& that no man remember me"[10] と認められており，ジュードの臨終の呪いの言葉は "*Let the day perish wherein I was born, and the might in which it was said there is a man child conceived.*"[11]

テスもジュードも，ヘンチャードと同じように，一生の記録の消滅することを願うのである。死後については Immanent Will の変化に押し流されて，暗闇の世界に沈むと考えていたことがハーディの詩などにみられる。

彼が死に強く関心を魅かれていたのは，死にゆく人々の自由さ，気軽さ，

気ままな無責任さへのあこがれとも受けとれる。人生の重荷から解き放たれ，更に「時」の支配を受けずにすむ自由な世界（ハーディの考えた）へ辿れることの魅力である。

しかし，テス，ジュード，ヘンチャードにとって，忘れられたいという最後の望みの痛ましい無常感，苦痛は，それ自体満足されるはずはあり得ない矛盾の極限である。苦悶，怒り，悔恨の一瞬一瞬は消すことはできなく経験のことごとくは耐えしのばねばならぬ。

如何なる願望や努力にもかかわらず，彼ら登場人物達は忘れ去られることはかなえられない。万物は永久に存在し続けるものと考えているハーディは，彼らが宇宙の意識の中に再生されることは承知のはずである。

死は救いにはなり得ず，永遠に犠牲者はそのまま生き続ける運命にあり，自由になる力もない。ハーディ自身は，早くから万物をとりかこむ宇宙と調和する悟りの境地に至り，全ての事柄や人間に対して detachment の態度と意識をもち，人間の本性を十分認識していたと考えられる。その根底には，人間は生きるに値しないという確信が満ちており，かえって，自ら死を選ぶことなどには思い至らぬ頑強な不思議な生命力に恵まれていた。

彼の文学的本領は，心の響きを純粋に伝え生涯にわたって綴り続けた詩の分野であり，散文作品には比較的少なかった神に関する考え，宗教観，人間観の真髄が，感じたままの形でうたわれている。詩の中に彼の真実と私達を厳しさの中にも人間性に心をひらかせる彼本来の資質が発揮されており，ハーディ研究の中心テーマを提示しているといえよう。

注

1) 亜細亜大学教養部紀要　第8，10，11号。
2) F. E. Hardy; The Life of Thomas Hardy, vol. 1, p. 275.
3) *ibid.*, p. 231.
4) D. Cecil; *Hardy the Novelist,* p. 222.
5) Thomas Hardy; *Tess of the D' Urbervilles,* (Green Edidition) p. viii.
6) ——— ———; *Jude the Obscure,* p. vi.
7) F. R. Southerington; *Hardy's Vision of Man,* p. 240.

8) T. Hardy; *The Woodlanders,* p. 404.

9) ——; *The Mayor of the Casterbridge,* p. 235.

10) *The Mayor,* p. 384.

11) *Jude,* p. 488.